

氏 名	かじ たに しん じ 梶 谷 真 司
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 19 号
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	世界内存在の現象学 —ハイデッガーとシュミッツ—

論文調査委員 (主査) 教授 小川 侃 教授 竹市明弘 教授 有福孝岳

論 文 内 容 の 要 旨

申請者は、人間存在の「世界内存在」という事象をハイデッガーとシュミッツの思惟の中心において、両者の解釈を進めながら、世界内存在という人間存在の在り方を事象に即して解明しようとしている。この論文は 6 章から成立し、序論：世界内存在の謎、第 1 章：現象学の理念と方法、第 2 章：投入論批判とその克服の途、第 3 章：自己存在の事実性と身体、第 4 章：身体と空間の多様性、第 5 章：雰囲気としての感情、第 6 章：存在への問いと経験の諸相、結語から成っている。

我々が世界の内に存在するという端的な事実を問いとして引き受け、その様態を現象学的に探求すること——本論では、この問題をめぐってハイデッガーとシュミッツの思索が、現象学の視点から論究される。そこでまず、「事象それ自身へ！」と定式化される現象学の理念と方法が、再度シュミッツ的な仕方で確認される。それは、できる限り外的な枠組や先入見を取り除こうとするものであり、シュミッツに即して言えば、意のままにならない仕方での迫り来る、汲み尽くし難い事象を、自己の存在との関わりにおいて捉えようとする努力である。このような現象学的立場から世界内存在を考察する際に、まず必要なのは、外的世界から切り離された内面世界として自己を捉える思考法、すなわちシュミッツの言う「投入論」の克服である。このような自己理解に基づいて、古代ギリシア以来、人間は、変転する事実的世界の影響から逃れ、自律的な理性的な存在として一面的に把握されてきた。そこで我々の自己は非空間的なものとして捉えられ、空間的に広がる周囲の事物や身体から分離された。その結果、世界の内では存在する自己の事実性や、世界との開かれた関わりが覆い隠されることになった。この閉塞状況の打開は、まず自己性や主観性を徹底して否定する経験批判論によってなされた。しかしハイデッガーはこの行き過ぎを是正し、自己の事実性を問いつつ、世界への根源的な開放性を取り戻そうと試みている。そしてシュミッツはこの課題をハイデッガーから学んで、さらにおのれの現象学の方向へ展開した。そこで中心的な問題になるのは、自己存在の事実性、および主客対立と心身二元論の根本原因をなす狭隘な伝統的空間理解の拡張である。これらの問題はいずれも、感情と身体の現象を発掘し直すことで解決策が見い出される。ハイデッガーは、

自己存在の事実性を現存在の存在の「そのつど私のものであるという性格」として捉え、他方シュミッツはそれを、「事実の主観性」として捉え直している。その際二人とも、情動的な経験に決定的な意義を認めている。ハイデッガーは、気分において我々は自己の存在の事実直面するとし、また気分とは、決して内面状態ではなく、世界内存在の様態として立ち現れるものである。こうした見解は、シュミッツにも受け継がれているが、ただし情動的な経験は常に身体的に媒介されているがゆえに、ハイデッガーとは異なり、シュミッツにとっては、身体(Leib)がより重要な主題になり、人間は何よりも身体的存在とされる。シュミッツの言う身体とは、「感知」という身体との一体化の経験において現れるものの総体であり、視覚や触覚によって捉えられる物的身体とは区別される、独特の力動的な空間的構造をもっている。すなわち物的な広がりには、分割可能で相対的な位置と間隔の体系を成しているが、感知される身体的な広がりには、分割不可能で先次的で、絶対的な「ここ」において現れる。そして身体の時々の状態感に応じて、その周囲には、伝統的な空間表象とは異なる身体空間——広さだけを持ち、方向も次元も持たない「広さの空間」と身体的方向によって分節された「方向空間」——が広がる。さらにシュミッツによれば、感情は雰囲気的なものであり、場所的に限定されない仕方で「広さへとあふれ出す」という独自の空間性を持つ。このように身体的存在としての我々の自己は、決して非空間的な内面世界のうちに存するのではなく、感知される身体空間と、雰囲気的に広がる感情空間を通じて、周囲の事実的世界に直接開かれているのである。またハイデッガーの存在に関する思惟は、シュミッツとの関連で見れば、こうした世界内存在における汲み尽くし難さの探求として捉え直される。この汲み尽くし難さは、存在理解においては個別的に明示化されえない有意義性としての世界の位相に潜んでいる。これはシュミッツの術語で言えば、「状況」、すなわち全体としてはまとまりを持ちながらも、その内部は同一性と差異性が未決定な「カオス的に多様な全体」である。この位相は、解釈などを通じて個別化することはできるが、それをいくら寄せ集めてもその全体性は提示不可能なものとして背景に留まっている。とはいえそれは、時としてまさに全体的に経験されるのである。

論文審査の結果の要旨

人間存在はこれまで単なる内面性とかあるいは心や精神性において把握されてきた。しかし、現在の現象学的な哲学の方向は、むしろ人間と世界との「あいだ」を主題化しようとしている。人間でも世界でもないこの「あいだ」は、内面性でも物体でもなく、主観でも客観でもない。それは、申請者によると、世界的存在の経験であり、この経験のうちに内的世界と外的世界、精神と身体との二元論的な分裂を克服する道を見い出そうとしている。単に経験の全体性や統一性、身体と心の合一、主観/客観のいまだ分かれていない状態などといっても、結局のところ具体的な仕方で人間存在の根本経験を明らかにしなければ何も言っていないことに等しい。

いま述べた問題状況に解明のための一石を投じるために、申請者はヘルマン・シュミッツの「新しい現象学」に注目して、この博士申請論文を仕上げた。この博士申請論文は、現在のドイツの現象学の新しい方向の試みのなかで重要な意味を持つと思われるヘルマン・シュミッツの「新しい現象学」についての研究を中心に据えて、フッサールの定礎になる「古典的現象学」の哲学運動のなかで極めて重要なハイデッ

ガの現象学的哲学を解釈しようとするものである。申請者は、人間存在の「世界内存在」という事象をハイデッガーとシュミッツの思惟を中心において、両者の解釈を進めながら、世界内存在という人間存在の在り方を事象に即して解明しようとしている。

この論文は6章から成立し、序論：世界内存在の謎、第1章：現象学の理念と方法、第2章：投入論批判とその克服の方途、第3章：自己存在の事実性と身体、第4章：身体と空間の多様性、第5章：雰囲気としての感情、第6章：存在への問いと経験の諸相、結語から成っている。この論文はいたるところで鋭い指摘を含みながらも、主としてシュミッツについて論じつつ他方でハイデッガーをシュミッツの思想への先駆として解釈しようとする。このような解釈の態度には、いくぶん疑問の余地があるにせよ、いまだ本邦ではほとんどまともに考察の対象にされていない現象学的な哲学であるシュミッツの「新しい現象学」を、これほどまでに我がものとした論文は本邦において最初である。

申請者のこの論文は、とりわけつぎのような特徴を持つ。第1に、身体、感情、雰囲気についてのシュミッツ現象学のテーゼを念入りに取扱い、本邦で最初にそれらの人間存在にとっての意味を解明したということ。第2に、ハイデッガーとシュミッツの関係を、少なくともシュミッツのハイデッガー解釈の視点から明らかにしたこと。第3に事象の直接性に立ち返りながら世界内存在という人間存在の事実性を身体や感情さらにはそのつど人間存在を規定する雰囲気との関連で明らかにしたことである。

申請者によると、ハイデッガーは人間存在を世界内存在として捉えたが、ハイデッガーはこの概念によって人間には内面世界などはなく、ひとはそのつど自己を乗り越えて世界のうちに脱自しているのだということを理解していた。人間存在は根本的に世界に開放された存在であり、このことは、シュミッツのいわゆる「感情の投入論批判」の先駆を成す。他方において申請者は、シュミッツにならって、感情の投入論批判を行ったアヴェナリウスをも取り扱いながら、シュミッツはアヴェナリウスに主観性を見出すことができなかったということ指摘した。つまり、アヴェナリウスは一切を無差別の経験に還元するだけで、このときには、私の自己は喪失されていることになる。かくして、シュミッツの立場は、ハイデッガーとアヴェナリウスの両方から学びながら両者をシュミッツなりの仕方乗り越えることだったと結論されている。

申請者の論によると、世界内存在の根本経験はシュミッツの概念では「事実の主観性」というべきものであり、それは、私が私の身体を直接に感知するというような場合に認められる。これは、私が直接に生きている身体であり、その意味での身体をシュミッツは詳細に身体のカテゴリーによって分析している。申請者は、こういう観点から、身体とその空間的構造や感情的空間の構造に関するシュミッツの分析を再構成している。

この博士申請論文は、フッサールやハイデッガーについてのシュミッツの拙速な判断をそのまま受け入れているところがあり、問題を残すが、しかし、本邦でいまだまったく論じられていないシュミッツ現象学を正面から取り扱い、主題化したという大きな功績をみれば、取るに足らぬこととみなすこともできよう。

申請者に望むことは、現象学の古典的な哲学者（フッサールやハイデッガー）をもさらに深く捉え直しながら、シュミッツの理解を深め、シュミッツをも批判しつつ現象学者として事象に即した自立的な思索

を展開しうるように大成することである。

よって、本論文は、博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成9年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。